

シンポジウム「過去の遭難に学ぶ」の感想

近藤昂一郎

今回の「過去の遭難に学ぶ」の各講演を聞いて、今一度登山に対する考えが深まった。

自分が山岳部に入って登山を始めてからは、幸いにも部員に大きな事故や遭難はなく、ましてや死人が出るということは無かった。しかし、毎年どこかの登山者が遭難し死亡するということは起きていたので、それらのことが起きないように山行計画を練る時は十分に検討をしてきた。しかし、報道されるような遭難や事故は全くの他人でありどこか他人事のように感じていることは、確かに少なからずあった。そう思っている中で遭難や事故に対して少し身近に感じ気を引き締めるきっかけになったのが佛教大学の杓子岳の遭難だ。この時遭難したメンバーの中に当時の山岳部員の友人があり、その反応を見て遭難の怖さや辛さ等を間接的に知り、気を引き締めて登山をするようになった。それから5年以上経ち、その間チベット遠征を含めそれなりの経験をした。また、学生生活がもうじき終わり、無事に学生登山を終えることが出来ることに安堵し、どこか気の緩みのようなものが自分の中に表れ始めた。そんな中今回の講演を聞くことで改めて登山に対して気を引き締めることが出来た。

講演にでてきた遭難はすでに事故報告書や人づてに聞いて知っていたつもりでいたが、当事者の口から聞くことで遭難のつらさや悲しみというものを深く知ることが出来た。講演の中で特に心に残ったのが、合宿のような毎年同じようにやるルーチン登山に対する心の緩みとリーダーの責任だ。このことを考えながら学生登山を振り返る時、遭難や事故というわけではないが誰かしら怪我をしたのは合宿の時だ。そして、その時に怪我をしているのは、新入生よりも上回生であった。これもルーチン登山に対する心の緩みだったのかもしれない。

来月から社会人となり、登山をする際の計画などが学生の時に比べて簡略化してしまうかもしれない。しかし、そんな時は今回の講演を思い出して十分気をつけて登山するようになたい。

岩澤貴士

海外登山

登攀的登山

<事例ごとの検討>

(1)梅里雪山大量遭難の事例

遭難要因

- 自然要因

- 直接原因：大規模・高速の乾雪表層雪崩
- 間接要因：悪天候による日程の遅延

- 人為的要因

- C 3 の位置設定ミス？

中国隊員と日本隊員の間で、合意形成に時間がかかる。

日本人・漢人・チベット人、三者間でのコミュニケーション上のディスオーダー。面子の立て合い。

異文化混合パーティは本来リスクを孕んでいる。なぜなら、異文化混成パーティでは、コミュニケーションの disorder により、隊全体の危険対処許容量が下がるからだ。したがって、常に危険が、自分たちの力量の許容量の範囲内に収まるように、難度の低い登山をする必要がある。すなわち、自分たちの力量を最大限必要とするようなハイレベルな登山は、混成パーティで行ってはいけない。

国際交流、国際協調はたいへん結構なことだが、そのために命を危険にさらすリスクが高まるとしたら、どうだろう。自覚的に問うことが必要である。自分たちの命より、日中間友好が重要だと考えるなら、ハイレベルな登山でも異文化混成パーティを組めばいい。

ただし、登山許可のための必要に迫られ、漢人との合同隊の形をとることが多いのは事実だ。（しかし、そもそもチベットを不法占拠している漢人政府に、チベットでの登山許可を貰わねばならないというのも、理不尽な話だ。）

他大学との合同隊も、広い意味では異文化混成パーティに当たるだろう。各山学部はそれぞれの登山文化を有するので、ちょっとした判断などで齟齬が生じることや、山での生活リズムにズレが生じることはある（とはいえ、使用言語が共通な分、むろん多国籍パーティほどではない）。また、新人を連れた山行も、まだ登山文化に慣れ親しんでいない者を隊に含むという意味では、混成パーティに通じるものがあると考えてよかろう。いずれにしても、自分たちの実力を最大限まで発揮する必要があるような山行は、十分に意思疎通ができるメンバーで行わなければならない。外部のメンバーと協同して山行に取り組む場合には、自分たちが完全なパフォーマンスを発揮しきれなくと

も、対処可能な山行計画を組むべきであり、事前に互いの技術、経験、登山観の違いなどを、十分確認しておく必要がある。

(2)御岳埋没遭難の事例

遭難要因

- 自然要因
 - 激しい降雪
- 人為的要因
 - 吹き溜まりをキャンプにしていた
 - ✧ (この点は、案外見過ごせない。吹き溜まりの場所は、天気の穏やかなときに見ると、平らに雪が積もって、快適そうに見えることがある。)
 - C Lの体調不良時、リーダーシップをとるべき S Lが偵察のため本隊を抜けていた
 - ✧ さらに、それに対して、オブザーバー的立場の上回生が制止しなかった
 - ✧ そもそも、C Lがリーダーシップを取れないほどの体調不良なのに、その具体的な容態を、周囲があまり把握できていない
 - 天気予報を見れば、悪天候は予想できたはずなのに、予定通りの入山、キャンプ設営という、柔軟性のなさ。
 - 体調不良 御岳のときの岩澤のような状況では？それとも単純に風邪？
 - 誰の指示というわけでもなく、漫然と雪洞に移動。

この遭難に限っては、かなり特殊な事例と考えていいだろう。あまりにも、お粗末なミスが多すぎる。しかし、だからといって対岸の火事として傍観することはできない。現に、この遭難は起きたのであり、それはつまり、人間は状況によっては、そのような単純で明確なミスを看過してしまうものだということを示している。

実際、我々も今年度前期に、雨が降っている中、沢に入渓するという愚行を犯したばかりだ。このときは、「もともと水量が少ないらしいし…」などと、もっともらしい理由付けが行われた。つまり、判断の理由など、その場でいくらでも出てくるのだ。後から見れば、あるいは事前に考えれば愚かとしか言いようのない判断も、その瞬間は気付かない。そもそも、人間の判断という物は、何かの理由に対して行われる場合より、予め決めていた判断に対して、その場その場で理由付けをしている場合が圧倒的に多いのだ。だから、必要なのは「降水確率 %以上のときは入渓しない」「日本列島上に 本以上の等圧線がかかるような西高東低の気圧配置下では行動しない」など、人間の判断が入る余地のほぼない、事実認定のみを基準とした安全規制が必要なのだ。

(3)クレバス転落事故

遭難要因

- 自然要因
 - 直接原因：氷河に潜む見えないクレバス、その下の極寒
- 人為的要因
 - 氷河上を 2 人のみで行動していた。

➤ 肩がらみコンテを行っていたため、強い衝撃に対する制動がきかなかった。

氷河上の行動ということで、普段の国内での登山活動と比べて、例外的なものと見がちであるが、そんなことはない。基本的に、救助には遭難者以上の人数が必要であるから、パーティメンバーの一人が要救助の状態に陥った場合を想定すれば、3人以上で行動するべきというのは、いずれの山行に対しても言えることだ。それに、使用する安全確保技術が、実際に現場で機能するかどうか、本番に近い状態での訓練を経ておかなければならない。登攀者が負傷して自力脱出不可能に陥ったとき、少なくとも確保者がロープをそのまま固定して脱出できる技術は必要だ。さらに滑車の原理を利用して人を引き上げる技術も身につけたい。

(4)西鎌尾根滑落事故

遭難要因

● 自然要因

➤ 雪での滑落。ただし、アイゼンはよく利く状態だったようだ。

● 人為的要因

➤ 滑落停止の失敗。新人だったためか。

新人の滑落停止技術が、形だけのものになっていないか、とっさのときに実行できるのか、上回生による審査を厳密化しなければならない。

「想像すらしていない場所で、事故は起こったということ。事故は予期せぬところで起きる」という言葉が印象的。まさにその通りで、ここでの課題は、

いかにして、予測困難な事故を予測しうるか

危険が予測されないような場所でも、当事者の事前予測を必要とせず可能な安全対策は何か

<身もふたもないまとめ>

人は死ぬときは簡単に死ぬ。それも他愛のない原因で。

これらの遭難事例を踏まえた上で、いつこのような事故が、自分たちに降りかかるかもしれない、そうはなりたくない、という気持ちを持ち続けることが、根本的には必要だ。

そして、人間はミスをする。よって、常に失敗を前提とした、事前の安全網が必要である。人間は客観的判断などできやしない。判断の基準は事前に数値化することによって、判断を人間の認識から外部化する必要がある。

戸愚呂（弟）「おまえ、まだ自分が死ないとでも思ってるんじゃないか？」（幽遊白書より）

死を恐れましょう。

吉田周作

今回のシンポジウムを通して、実際に遭難にあわれた方々の話を聞くという貴重な経験をし、改めて遭難について考え直すことができた。

いくつかある講演の中でも、御嶽山での事故報告は毎年アイゼン合宿に行く山であり、私にとって最も身近なものだった。以前に御嶽雪洞埋没事故の報告書を読んだことがあった。その中で、一番心に残っていたのは、皆が忙しくまとまっている当時の山岳部の状態であり、それが事故に繋がったということだった。そして今回の講演の最後に、柴田さんが事故当時の状況を雪洞の入り口を掘り返していた時の粉雪と掛け合わせて『固めようとしても粉雪のように固まらない事態』と言っていたことが心に残っている。つまり、部員の心がまとまっていたので、山行前・山行中にいくつもの想定外の事態が発生し、最終的に遭難という結果になったということである。このことから、改めて部員が結束しておくことの重要性を再認識し、忙しくとも部員の結束を高めておく工夫が必要だと考えた。

また、リーダーシップのことを強調したことが印象に残っている。誰がリーダーであるのかを明確にしておかなければいけないということだった。リーダーは上回生がいても、上回生に甘えることなく自分がリーダーであることを認識して行動をとらなければいけないとのことだった。しかし、緊急事態が生じた場合はそうではないと思う。経験が豊富な上回生の支持に従う方が賢明であると考える。そこで事故が起きた際には、いったん誰がリーダーであるのかえお確認する必要があると思った。

これら部員の結束力とリーダーシップということは他の事故報告の中にも共通していたものがあることから、事故とのかかわりが深い因子と考えられる。したがって、我々現役部員は登山技術を高めることに加えて、部員の結束力とリーダーシップを高めていく必要があると思いました。

最後に、今回のシンポジウムを催してくださった山岳部のOBの方々と講師の方々に深く感謝しております。ありがとうございました。

坂本 諭

今まで幾つかの遭難報告書を読んでその内容を理解している、と自分では感じていた。しかし、今回の遭難講演会を聞いて、報告書では分からぬ、当事者にしか伝えられないことを知ることができた。

講演をして頂いた方々は、当時の様子を鮮明に説明され、生々しいその状況を語られていた。当時のことなどもう話したくない、やめてほしいとも思われたであろうが、それでも語って頂けた。おそらく、その場にいなかった我々がどう頑張っても完全には理解できないし、その場にいた者しか得られない感情というものがあるだろう。ただ、それでも現役のため、これからも山に登る者のために語って頂けたことに感謝したい。

先日、プロガイド 笹倉孝昭氏の講習を受けたが、その時、「計画に時間をかけることが必要。計画をしっかり練って山に入ることで、未然にトラブルを防止することができる。」とおっしゃっていた。実際事例を聞いていると、その場で起こってしまった突発的なものもあるが、計画段階で事前に確認をしておけばどうにかなったのではないか、と感じるものもあった。計画段階で十分に検討すれば遭難は起こらないということではないが、遭難のリスクを減らすことは必要だと感じる。

また、講演中何度も「リーダーが・・・」と言うのを聞いた。隊の中での指示は、確かにリーダーが出るものだし、リーダーが精神的・技術的にあるレベルを超えていなければ隊として行動不可能になることは容易に想像ができる。だが何かあった場合、決してリーダーだけの責任にするではなく、隊としてどうだったのかを考えることも必要だと思う。一つの組織として行動するならば、全員が相応の技術・精神・判断力をもち、山に入るべきだと感じた。そのために日々の練習が必要だと感じた。

石丸祥史

今回のシンポジウム「過去の遭難に学ぶ」は、私にとって非常に心に残るものだった。講演者の方々が目頭を拭い言葉を詰まらせるのを見て、遭難自体の悲惨さのみならず、遭難後の無念さ・後悔の大きさを感じられた。

山岳部入部直後に御嶽山の遭難報告書を読んでぞっとした記憶があったからか、今回のシンポジウムで個人的に一番印象に残ったのは、柴田隆宏 OB が発表してくださった「御嶽山雪洞埋没事故」の公演だった。まず記憶に残ったのが、入山時の天気図を見るところから天気が悪くなるのが明確なのに登山を決行した事である。この事をある OB に尋ねてみてわかったのだが、昔は「アイゼン合宿はトレーニング山行」という考え方であり荒天でも決行するのが普通だったということだった。現在の「どんな山行でも、荒天などの回避できるリスクは全力で回避する」という考え方と違う事に驚いた。確かに現在のようにリスクを回避しすぎると能力が上がらないが、かといってリスクを冒しすぎると事故の原因になってしまうだろう。

この能力向上とリスク回避の二者択一についてシンポジウム後に考えてみたが、講演者の福田久勝 OB が繰り返し仰っていたように、チーフリーダーがメンバーの状態・力量を考慮してこの選択を行い、その選択の全責任を負うべきだという結論に達した。御嶽山で問題となったリーダーシップの機能や責任の所在の観点から見ても、チーフリーダーが判断し、他のメンバーに指示をするのが妥当であるだろう。

講演者の方々は、当時の事を思い出し、無念さや後悔の念を改めて感じることになり、つらい思いがあったと思う。その思いを無駄にしないためにも、この講演を参考にして遭難回避の方策を練っていこうと考えている。

講演者の方々やこの講演を企画してくださった OB の方々、本当に有難うございました。山岳部上回生として、遭難回避に全力を尽くして部を運営していこうと思っています。

間瀬大輝

今回は貴重なお話をありがとうございました。これだけ多くの遭難報告を、その事故の当事者の方々から直に聞く機会はほとんどないので、良い経験になりました。

今回のお話を聞いて、改めて遭難の恐ろしさを感じました。あふれ出る感情を抑えながらも話す姿を見て、何十年も前の事故であっても、当事者にとっては昨日起ったことのようであるのだな、と感じました。遭難による死亡事故とは、単にある登山者が死んだという個人の問題ではなく、その関係者にも多大な影響を与えてしまうものであるのだ、と。当事者でなければ、同じ山を登っていた仲間を失うことがどれだけ辛いものであるのかはわかりませんが、推し量ることはできます。

「登山」という行為は、自ら命を危険にさらす場所へと分け入り、生と死の狭間、その極限に挑むものです。サッカーや野球などほかのスポーツとは全く性格の異なるものです。たとえ可能性がほんのわずかであったとしても、自分の命をかけるわけですから、そこには、試合に負けた、とか、あのシュートを失敗してしまった、ということに対して負う責任とは比べ物にならないほど大きな責任が個々人に課されます。特に、リーダーに対して課される責任は非常に大きいです。

リーダーには、隊のなすべき行動をその時々の状況に合わせて臨機応変に対応し、隊のメンバーの安全を保証する、という責任があります。安全を保証するとは、命を預かるということであり、大げさな言い方かもしれません、メンバーの人生、親族など関係者の人生に関わることともいえます。だからといって、リーダーがすべての責任を負うのはどうかと思います。一人の人間が多くの人の運命を背負うというのは、荷の重すぎる話です。

遭難が起きると、リーダーシップの話が必ずと言っていいほど出ます。大学の山岳部では、基本的に上級生は知識・技術・経験に関して下級生よりも上であるため、リーダーは上級生がなることがほとんどです。山岳部は部としての活動イコール登山であり、普段暮らす世界とはかけ離れた世界で寝食を共にするわけです。それゆえ、部員間の距離はかなり近いといえます。当然、危険の伴う活動であるので、隊のメンバーが親密であるのは良いことですが、逆に甘さが出るのでは、と思いました。

隊が一つの組織として行動するには、信頼関係がなければなりませんが、下級生からリーダーへの過度の信頼があるのではないかと思うのです。リーダーの指示に従っていれば大丈夫、何かわからないことがあってもすぐに教えてもらえる、という気持ちは、自分の命を守ることにはつながらないのです。下級生とリーダーが、信頼し得る部分と、信頼しがたい部分をきちんと線引きする必要があるのだと思いました。

以上が、1年生として山岳部の活動に参加ってきて、今回の講演で感じたことです。どう隊を編成するのか、リーダーはどこまで責任を持つかなど、答えのない問題はたくさんありますが、それもまた山岳部らしいのではないでしょうか。

